



30期生で附属中2年の田中さん、英検準2級合格です。



27期生の的場さん、就職決定の報告に来てくれました。



19期生でJRに勤める26歳の浦田君が差入持って。



7期生でリクシルに勤める38歳の渋谷君、12月から5年間のタイ勤務という事なので顔を会せにきました。

11月14日 今年度になってからコロナ禍の影響で実施していなかった特講ですが、定期テスト前なのでテスト範囲を中心に勉強しました。勉強は日頃の積み重ねです！

「シャツの襟則」誰のため？ 北海道新聞 11・12
 学校生活で児童や生徒が守るよう求められている校則。髪形から下着の色まで厳格に定められ、現場では「理不尽だ」「細かすぎる」と不満の声も上がる。社会の変化に合わせて柔軟に見直されるべきものが、子どもたちの意見が反映されず、学校側のお仕着せになっていることも多い。そのルール、一体誰のため？

高まる不満 見直しも
 福岡市の中学1年の男子生徒（13）は、男性教師による身だしなみ検査に違和感を覚えた。男子生徒によると、教師らは生徒を廊下に並ばせてシャツのボタンとボタンの間を開かせ、下着の色を確認したという。

検査に先立ち、「下着は白・ベージュで華美でないもの」という新たな規則が追加されていた。「意見も聞かれず、納得のいく説明もない。僕たちには下着の色を選ぶ自由さえない」。男子生徒はため息をつく。

福岡市の公立中のPTA会長を務めた経験がある

り、校則問題に詳しい後藤富和弁護士は「下着の色指定や検査はセクハラ。社会では許されないことかなぜ学校で起きているのか」と非難する。他にも「靴はどこから見ても真っ白」「ヘアピンは2〜3個」など、生徒手帳に記載されていない細かいルールが追加された例もあると明かす。

理不尽な校則に注目が集まったのは、17年に大阪府の女子高生が地毛の黒染めを強要されたとして府に損害賠償を起したことがきっかけだ。その後、府教育庁は府立高に校則の点検を指示し、全校が校則をホームページで公開した。

子ども中心のルールづくりに取り組み動きもある。

東京都世田谷区の桜丘中では10年以降、「生徒に考える力、判断力を養ってほしい」と校則や定期テストは今年8〜10月、小学1〜3年を除く児童や生徒、保護者、教職員を対象に校則についてアンケートを行い、見直しを進めている。

アンケートには計約5万人が回答。必要のない校



熊本市教育委員会のアンケートで出た主な意見

- 中学生
 - 身なりに関する校則は要らない。人間性を豊かにすることが必要
 - 校則を見直し生徒で作ると良いと思う
- 中学教職員
 - (校則は)個性を無視
- 中学保護者
 - 制服はスカートもズボンも選べる多様性があった方がいい
- 高校生
 - 適度なツープロックは清潔感もあると思うが、禁止なので指導した
- 中学教職員
 - (校則は)先生たちが考えたから安心できる
- 小学生

北海道新聞の夕刊の一面に載った記事です。私がずっと言い続けてきたことです。少なくとも湖陵高校が制服、校則を廃止しなければ、釧路市は衰退するばかりです。

先日の釧路新聞にも「優秀な人材を地元に残さなければ」という記事が載っていました。制服、校則で生徒を管理することは、過保護、過干渉と同じなのです。多様な価値観や発想など生れるはずが無いのです。

能力のある高校生を、制服や校則で縛りつけるのは、学校が無能だからに他なりません。コロナ後の後の社会は大きく変化します。そして2年後には18歳が成人です。もう既に格差はどんどん広がっています、しかも中学生、高校生の時点です。塾生たちを見ても感じられます。日常の積み重ねが大切なのです。非正規社員が4割の日本、子供たちの将来、未来は今、大人たちがどう行動するかにかかっています。

則として「靴下の長さ、髪を結ぶ高さ」「日焼け止めの禁止」などが挙げられた。児童・生徒が校則を作り、考える場が「ない」と答えた子どもは72.2%、教職員は68.5%。そうした場が必要との回答は、子どもも教職員も8割を上回った。

熊本市教育委員で熊本市の苦野一徳准教授(教育学)は「学校のシステムは多くが『みんな同じが美徳で効率的』となっていて、多様化への対応が追い付いていない」と話し、「子どもが声を出せる環境を整える必要がある」と指摘。教師は忙しく、ルールが何のためにあり、良いものなのかを、子どもと共に問い直す機会も少ないとしている。

頭髪の自由壁高く生徒の主体性や多様な性を考慮し、性別に関係なくスラックスやスカートを選べる制服の導入が全国で進んでいる。一方、「頭髪の自由」はまだハードルが高い。

男女別に髪形の規則を定め、耳の上や襟足の髪を刈り上げ段差ができる「ツープロック」を禁止する学校もある。

「なんでツープロックはだめなの?」。福岡市のある中学で9月、3年の男子生徒が頭髪の規則を話題にすると、担任教師が口を挟んだ。「じゃあ、人生を懸けてツープロックで高校受験に行ったらどうだ。生徒たちは押し黙った。その場にいた女子生徒(14)は「受験を理由にされると何も言えなくなる」と打ち明ける。

ツープロックを巡っては、東京都の教育長が3月、一部都立高での禁止の理由を問われ「外見が原因で事件や事故に遭うケースがある」と発言し、話題になった。

これに対し、生徒からの要望を受けて3年前にツープロックを解禁した世田谷区の私立大東学園高の佐々木准教頭は「髪形が原因で生徒が巻き込まれた例はなく、被害者側の問題があるとは考えにくい」と指摘する。

31	木	年末・年始休み(3)	30	水	◆冬期講座⑦(中3)	29	火	◆冬期講座⑥(中1・中3)	28	月	◆冬期講座⑤(中1・中3)	27	日	◆冬期講座④(中1・中3)	26	土	◆冬期講座③(中1・中3)	25	金	休塾	24	木	通常持授業	23	水	通常持授業	22	火	通常持授業	21	月	通常持授業	20	日	◆冬期講座②(中1・中3)	19	土	◆冬期講座①(中1・中3)	18	金		17	木		16	水		15	火		14	月	景雲定期(15)	13	日	休塾	12	土		11	金		10	木		9	水		8	火		7	月		6	日	休塾	5	土	中3土曜特講	4	金		3	木		2	水		1	火	
----	---	------------	----	---	------------	----	---	---------------	----	---	---------------	----	---	---------------	----	---	---------------	----	---	----	----	---	-------	----	---	-------	----	---	-------	----	---	-------	----	---	---------------	----	---	---------------	----	---	--	----	---	--	----	---	--	----	---	--	----	---	----------	----	---	----	----	---	--	----	---	--	----	---	--	---	---	--	---	---	--	---	---	--	---	---	----	---	---	--------	---	---	--	---	---	--	---	---	--	---	---	--

公立高校入試まであと92日
共通テストまであと46日

コロナの感染が広がっています。検温、マスク、手洗いを!

ストップ 過保護・過干渉!

持続可能な開発目標 12月の予定

日本の「感染者パッシング」「マスク警察」は、なぜ？

コロナ禍があぶり出した「世間」の闇 (11月号からの続き)

四つの「世間のルール」

◆第一に「お返しのルール」。お中元・お歳暮に代表される、「もらったらず必ずお返ししなければならぬ」というルールです。しかも、「全返し」「半返し」などそれぞれ細かいルールがある。

モノのやりとりに限りません。日本で、LINEの「既読無視」が問題視されるのはそのためです。日本社会には「お返ししなければカドが立つ」という同調圧力がまん延しているのです。

第二は「身分制のルール」。年上か年下か、格上か格下か、が関係性の力学を決める。だから名刺交換しないと安心して話もできない。

英語ならば「YOU」と「I」の二つで済むが、日本語では「身分」に合わせて適切な言葉を選んで使いわける必要があります。これは大きなストレスです。

第三は「人間平等主義のルール」です。

——「平等」は、良いことですよ？

◆「世間はみんな同じでなければならない」というような「平等」ですけどね。

人間には本来、能力や才能に差があるのに、それを認めない。一種の悪平等が起きやすい。かつて問題になった「運動会で全員が手をつないでゴールする」というやつです。

ねたみやそねみが強くなる。高額のお宝くじに当たっても、海外ではメディアで堂々と顔を出して話すし、実名で取材に応じている。日本でそれをやったら「世間」にねたまれて大変なことになる。

「みんな一緒」という同調圧力が強過ぎるからです。

「マスク警察」「帰省警察」も……

——「出るくいは打たれる」も、それですね。

◆そう。「同調圧力」の中で、同じように行動しようとしなない異質な存在を排除しようとする力が働くのです。「自粛警察」「マスク警察」「帰省警察」……どれも、まさにこの「同調圧力」が噴き出した結果の現象です。

だから、屋外でもマスクを外せない人が多い。人の目が気になるからです。僕は、屋外じゃマスクはまずつけません。

——実は私、一人で電車に乗る時はマスクをしていなかったんです。しゃべらなければ飛沫(ひまつ)も飛びませんから。科学的には意味がない、と。でも「マスクをつけていないと、写真を撮られて、ネット上でさらされるから、マスクをした方がいいよ」と知り合いから助言を受けました。

◆科学的かどうかは「世間のルール」には関係ないですからね。まさに、それが第四のルール。「呪術性のルール」です。

例えば「友引の日に葬式をしない」といった俗信・迷信が山のようにあり、それを守らないと世間から冷たい目で見られる。これも同調圧力の一種です。おかしいと思っても、科学的でないとは分かっている、逆らえない。

——確かに。

世間では病気は「ケガレ」

◆「呪術性のルール」において、病気は「ケガレ」です。元ハンセン病患者の差別はまさにその典型。犯罪加害者家族がたたかれるのも、犯罪が「ケガレ」だから。新型コロナウイルスも同じです。

「ケガレ」だから、感染者本人だけでなく、家族が非難される。果ては、医療従事者までが深刻な差別を受ける。病を「ケガレ」ととらえ、「ソト」へと排除しようとする。

——医療従事者は、海外ではむしろヒーローやヒロインのように人々に応援されているのに……。

◆この四つのルールからできあがったのが、僕の考える「世間」です。

自粛期間中に営業している店に投石や張り紙があったのも、感染者やその家族のプライバシーが暴かれ、たたかれたのも、果ては医療従事者までが差別されたのも、「世間」が強化されたためだと考えています。

同調圧力の功罪

——しかし、「同調圧力」がコロナ対策ではプラスに働いた、という見方もありますよね。

◆ええ。欧米諸国のように、強権的なロックダウンや罰則がなくとも、人々が外出を自主規制し、感染爆発をまぬがれました。「ソトはケガレ」という「世間」特有の衛生観念が、日本ではマスク着用率を上げました。

そもそも日本の治安が良いこと自体も、逸脱行動を許さない「世間」の同調圧力のプラスの側面と言えます。

東日本大震災の時には、海外メディアが「日本では略奪も暴動もほとんど起きない！」と感嘆しました。

欧米では「法のルール」が崩壊したら、歯止めになるものがない。だからコロナ禍でもロックダウンと罰則が必要だった。日本は違う。「法のルール」が崩壊しても「世間のルール」が発動し、みんながそれを守ろうとする。人の目が気になりますから。

——つまり、「世間」にもメリットはあるわけですね。

◆しかし、「世間」のデメリットの方がずっと深刻です。

「世間」の最大のデメリットとは……

◆「世間」の抱える一番大きな問題は、社会の閉塞(へいそく)感や生きづらさだと思います。これがこの国の自殺率の高さにつながっている。「世界一安全な国」は「世界一自殺に追い詰められやすい国」とも言える。

各地に吹き荒れる「自粛警察」の嵐。同調圧力に屈しやすい国民性が露呈したとの指摘も……

——若い世代の死因の1位が「自殺」というのは、本当に深刻な問題です。

◆もう一つ。日本でなかなかジェンダーギャップの問題が解決しないのも、「世間のルール」が根強いせいだと思います。

——えっ。ジェンダーの問題にも「世間」が絡むのですか？

「世間」とジェンダー格差

◆世界経済フォーラムによる「ジェンダーギャップ指数」では、日本は153カ国中121位です。なぜ日本では、これほど男女同権が進まないのか。日本では男尊女卑や男女性別役割分担が「世間」の中で構造化されている。そういう「世間のルール」が山ほどあるからです。

阿部謹也さんが著書にこんなエピソードを書いていました。「めおと茶わん」を海外に贈り物として持参したら、大きい方を妻が選んだ。阿部さんはあわてて「そちらは男性用です」と説明しようとして、合理的な説明ができなかった、というのです。

選択的夫婦別姓の問題もそうです。「法のルール」では夫の氏か妻の氏、自由を選ぶはずなのに、この国では96%が夫の氏を選ぶ。なぜか。みんながそうしているからで、それに逆らうのが実は大変だからです。同調圧力です。「法の下での平等」という「法のルール」が、「世間のルール」を前になおざりにされてしまう。

「世間のルール」が根強く生き残っているから、日本ではなかなか「男女平等」が進まないのです。

少子化にも影響する「世間」

◆ほかにさまざまな社会問題に「世間」が絡んでいます。

日本では少子化が深刻な問題ですが、結婚しないで出産する「婚外子」の割合が日本は極端に低く、まだ2%ぐらいです。

一方、米国では約3割、フランスで約5割、北欧諸国はさらに高い。なぜ日本で婚外子率がここまで極端に低いのか。「結婚しないと子どもを産んではいけない」という「世間のルール」があるからです。これも「法のルール」ではない。

——ジェンダーの問題でいえば、2000年ごろを境に、むしろ時代が逆行しているのではないかとよく指摘されます。「男女共同参画」という言葉がバックラッシュを受けたり、性教育に対して「行き過ぎだ」などの批判が集まるようになったり。

◆実は僕は、この20年ぐらいで「世間」が復活してきている、と考えています。グローバル化が進み、成果主義が広がり、「強い個人」になることが求められた。しかしそもそも「個人」が確立していない日本では、多くの人にとってそれは大きなストレスとなった。うつ病の薬が爆発的に売れ、自殺者も急に増えた。

これは、もともとあった古い「世間」が過剰反応を起こし、盛り返したのだと考えています。

強化される「世間」

——「世間」の過剰反応、ですか。

◆社会学者のギテンズは「再埋め込み」という概念を唱えました。近代は、共同体や宗教につながる個人を解放する「脱埋め込み」の時代。ところが1990年代くらいから、個人がどんどんバラバラにされていった。世界的にグローバル化が進み、共同体を失った人々が再び宗教や、人種や、国や、何かしらの共同体にもう一度包摂されたい、安心したい、となった。

これが英国のEU離脱問題であり、米国でのトランプ大統領の誕生につながっている。

——日本でも、「日本スゴイ」系の書籍やテレビ番組が人気を博したり、ヘイトスピーチがより深刻になったり、「日本人」であることに包摂されたい人が増えているように思います。

◆日本人の場合は、再び包摂を求めた先の共同体が「世間」だったのです。「出るくいは打たれ、異質なものは排除されるが、「みんな一緒」の世間。ソトには冷たいが、ウチには温かい「世間」。その結果、排外主義が広がり、「同調圧力」はますます高まっていく。

若者の間では「空気読め」という価値観が強まり、それができないと「KY」と切り捨てられました。死刑執行数が増え、犯罪に対する厳罰化を求める声が高まったのも同じ流れの中にあると思います。(次号に続く)